

ディケンズ時代の女性（4）

増 田 秀 男

1. 女性の慈善活動

『荒涼館』（*Bleak House*, 1852-53）には、二人の女性慈善家——Mrs Jellyby と Mrs Pardiggle——が登場する。

まず慈善家の一人ジェリビー夫人について見てみよう。夫人は 'Telescopic Philanthropy' (*BH*, Ch. 4) によって、アフリカのニジェールにイギリス人の家族を送り、コーヒーの栽培とアフリカ人の教化に当たらせる事業に奔走している。

'The African project at present employs my whole time. It involves correspondence with public bodies, and with private individuals anxious for the welfare of their species all over the country.' (*Ibid.*, Ch. 4)

夫人自身がここで語ってるように、「目下のところ」夫人の時間はすべてこの事業のために、というよりも、この事業に必要な「文通」のために費やされており、夫との関係、育児、家政はなおざりにされている。語り手であるエスターが伝えるジェリビー家の様子、子供たちの様子は、崩壊家庭のそれであり、さらに、子供——特に長女——と夫は、母、そして妻であるジェリビー夫人に深い恨みを抱いている。

次にもう一人の慈善家パーディグル夫人であるが、彼女はジェリビー夫人よりさらに精力的で、ありとあらゆる活動にいそしんでいる。

'I am a School lady, I am a Visiting lady, I am a Reading lady, I am a Distributing lady; I am on the local Linen Box Committee, and many general Committees; and my canvassing alone is very extensive —

perhaps no one's more so.' (*Ibid.*, Ch. 8)

実はディケンズはすでに『ボズのスケッチ集』(*Sketches by Boz*, 1835-36)で「わが教区」の 'ladies' charitable institutions' について書いており、そこでは、

'..... the ladies' dispensary, the ladies' sick visitation committee, the ladies' child's examination society, the ladies' bible and prayer book circulation society, and the ladies' childbed linen monthly loan society.....' (*SB*, Ch. 6)

など、女性のみで組織されている様々な慈善団体の活動、団体同士の角突き合い、指導者同志の確執などがユーモラスに描かれているが、パーディグル夫人は『ボズ』に描かれているような地域的なあらゆる慈善組織ばかりでなく、全国的な各種の慈善組織にも「委員」としてかかわっている訳である。ちなみに 'canvassing' とは 'Charity electioneering' すなわち慈善の対象となる人達を寄付者が選出する時に行なわれる〈選挙〉の際の〈選挙運動〉である (Finlayson, p. 71)。また、夫人が自慢している〈選挙運動〉の範囲の「広さ」は、夫人が慈善家仲間で〈顔のきく〉存在であることを意味していると同時に、夫人が慈善の対象となる人達の生活実態を良く知っていることも意味している。彼女はジェリビー夫人と違って、自ら子連れで貧しい労働者の家に行って、これもジェリビー夫人と違うところだが、宗教的なパンフレットを読んで聞かせたりするのである。ただし、いつも家庭訪問に連れていかれる子供たちは彼女に大変な不満を抱いている。この点はジェリビー夫人の場合と同じである。

要するにディケンズは、家政や母親業をなおざりにして慈善活動に熱中している二種類の母親を批判的に描いているのであるが、この二人の母親について、はっきりした性格づけをしている。先ずジェリビー夫人の慈善活動は前に見たように「文通」中心であり、その意味で非対面的である。それに対してパーディグル夫人のやり方は徹底的に対面的である。さらに前者の情熱がクールで抽象的なそれであるのに対して後者のそれは熱烈かつ具体的である。しかしいずれにせよ二人の女性は批判的に戯画化されている。この二人は個性的な二人の人物というよりは、あくまでも女性の、殊に主婦の慈善活

動を批判するために作りだされた人物なのである。そのために、例によって、慈善活動による弊害が超現実的に拡大されていることは言うまでもない。

II. 背 景

ところでディケンズが女性の慈善活動，ことに母親のそれをカリカチャーすることを思い立った背景には，先ず〈慈善事業熱〉とでもいうべき現象があった。ロンドンには，1850年の時点で18世紀以前からの103の慈善団体，18世紀中にできた114のそれ，1800年から1850年の間にできた279のそれがあった。しかも，1850年からの10年間で，慈善団体はさらに144も創設された（Finlayson, p. 62）のである。ジュリビー夫人の慈善団体のモデルになった団体は，1840年代に活動していて結局は目標を達成できなかった団体であると言われているが，1830年代頃からこの種の団体が急激に増えはじめたことから，ディケンズを含む当時の人達は，これを問題のある社会現象と捉えたのである。なぜならまず第一に慈善もまた階級社会の力学が働く場だったからである。

Of course, those most active in good works were not always disinterested. Snobbery and ambition played their parts. Through philanthropic organizations and subscriptions social climbers could advertise their wealth, associate with the aristocracy, and achieve public notice. (Read, p. 129)

慈善は「私心のない人達」だけが集まる場ではなく，階級社会の中で「俗物根性や野心」の旺盛な人達が集まりやすい場だったのである。ある皮肉な観察者は1846年に，慈善に群がる人達の動機の主たるものは，‘love of power, ostentation, vanity’ であると言い，さらにその他として，‘superstition’ のために，すなわち「死後に有利」と考えて慈善活動をしている人達，また単なる‘spite’ すなわち「遺産を貰うことをあてにしていた連中の，遺書を読み上げられたとき自分の名が出てこなくて唾然としている顔」を想像してそれが楽しみで慈善団体に寄付する人達の例を挙げている（Finlayson, p. 49）。つまり慈善は，動機の面で見るとかぎり〈生臭い〉と考える人達も数多くいたのである。それだけではない。もっとはっきり〈生臭い〉動機から，すなわ

ち金儲けのために、慈善活動に加わる人達もいたはずである。1869年の200余りのロンドンの慈善団体の年間収入は、推定200万ポンド、同じく1885年のロンドンの1000余りの慈善団体のそれは、450万ポンドだったからである(Read, p. 129)。

慈善団体が急激に数多くできつつあったこと、また〈胡散臭い〉動機が想像されたことの次に慈善が問題視された理由は、主婦も含む女性の参加であった。『ボズ』の教区における女性の慈善団体の数の多さ、またパーディグル夫人がかかわっている団体の多様さからも想像できるように、中流階級の女性たち、特に主婦たちは、多種多様な慈善活動に多数参加しはじめたのである。そしてその参加率の高さは歴史家に次のように言わしめるほどのものであった。

The claustrophobia of middle-class housewives, housebound and bored, was a product of the interwar spread of anonymous suburbia and the encroachment of salaried social workers, particularly in health care and visiting, on the voluntary sphere; it was not a Victorian malaise. (Thompson, p. 253)

ヴィクトリア朝の主婦は「家に縛りつけられ退屈してなどいなかった」と彼は言う。慈善活動は主婦の「閉所恐怖症」予防の特効薬だったと言うのである。では、外の世界に出ることがタブーであったヴィクトリア朝時代の主婦になぜ慈善活動に携わることが許されたのか。

イギリスの主婦たちが「閉所恐怖症」に罹るようになったのは、「有給のソーシャル・ワーカー」が慈善の領域を侵しはじめてからであるという上の文章の一節からも分かるように、ヴィクトリア朝の主婦が、中流階級女性の不労という大原則にもかかわらず、慈善活動をすることができたのは、なによりもそれが収入に結びつかない、それどころかむしろ出費の必要な、つまり不労の原則を振りかざして男性が止めることのできない〈仕事〉だったからであった。

だが勿論、当時の女性が社会に出て活動するためにはもっと大きな障害、すなわち、女性の本来の居場所は家庭であるとする、当時のイデオロギーの中心となる考え方があった。そしてそれを乗り越えるために役立ったのは、意外なことに、当時のイデオロギーそのものであった。

女性には女性の活動の場、男性には男性の活動の場があるとするヴィクトリア朝時代のイデオロギー、すなわち男女別活動領域理論の根底には、相補性理論があった。そしてその結びつき方はおよそ次のようなものであった。男性は女性よりも体力、知力、活動力に優れ、女性は情緒的、宗教的、道徳的に優れている。だから男性は危険が一杯の社会に出て働くのに適しており、女性は温かい家庭を作り、良い子を育てるのに適している。したがって、男女がそれぞれの特性を生かしてそれぞれの場を守る。これが最善の道だ。相補性理論と男女別活動領域理論はこのように結びついた。つまり、男性は、女性を家に〈囲い込む〉のと引き換えに、女性の男性に対する道徳的、宗教的優越性を認めたのである。そこで当然男性は、理論的には、道徳的、宗教的な面では女性の感化あるいは助力を受けるべき存在となった。

The centre of women's influence was their religious strength and moral purity. This was protected by their domestic seclusion and their isolation from the harsh material world which threatened the piety and the morality of their menfolk. It was because of this moral purity that women could simultaneously be inferior to and guide their menfolk — and the provision of this guidance was their great mission Women's mission began in the home, but it did not end there. Through their domestic role, they were to do no less than bring about the reformation of their entire society. (Caine, pp. 44-5)

『荒涼館』の女性慈善家二人に当てはめて言えば、パーディグル夫人は上の文中の「宗教的な力」を、ジェリビー夫人は「道徳的純粋さ」を代表する人物ということになるであろうが、いずれにしても男性は、少なくとも宗教、道徳の面では、女性の「教導」を仰ぐ立場に置かれるようになり、一方女性は、その方面での男性の「教導」を「大いなる使命」と感ずるようになったのである。そしてそうなれば、女性の使命感は、家庭ばかりでなく社会についても向けられるようになる。理論的には、男性の道徳的、宗教的な能力は女性よりも劣っているのであるから、男性が作りだした社会も、当然、道徳的、宗教的な面では欠陥があるはずであり、女性による〈手直し〉が必要だということになるからである。女性が「大いなる使命」の自覚から「社会全体の改革」に乗り出したとしても、男性は止めようが無かったのである。

つまり、女性は道徳と宗教の担い手であるという、男性みずからが作りだし、女性が信ずるにいたった考え方が、男性の側には慈善活動の禁止を不可能にするものとして働き、女性の側には使命感をもって取り組むためのインセンティブとして働いたのであるが、こうした考え方が、どちらかといえば Sarah Ellis に代表されるような保守的な女性たちの信条であったために、そして当時は保守的な女性が圧倒的に多かったために、慈善活動に参加する女性の数は非常に多かったのである。ヴィクトリア朝時代の女性は慈善活動のお陰で「閉所恐怖症」に罹らずにすんだというトンプソンの証言は誇張とは言えないのである。

これまで述べてきたような男性の側の〈論理的手詰まり状態〉を頭に置いて読むと、次のような記述はさらに分かりやすくなるであろう。

By adhering in the main to traditional values, increasing numbers of privileged women were able to venture into areas untraditional for women of their class: the prisons, the schools, the hospitals, the homes of the poor, the streets of the new cities. To women expected to confine their activities to domesticity, the easiest way to a life outside of the parlor lay not in overt rebellion, but in the virtuous path of charity work. (Anderson, p. 177)

「伝統的な価値観」と「高潔な慈善活動の道」は、むしろ直結するものだったのである。だからこそ中流階級の女性たちは、これまでは足を踏み入れることを許されなかった「牢獄、学校、病院、貧しい人達の家、新しい都市の通り」に大挙して出ていったのである。

それらの場所で女性が展開した慈善活動は、前に挙げたロンドンの慈善団体の活動が氷山の一角に過ぎないと言えるほど多種多様なものであった。だが、多様性はともかく、ディケンズを含む男性にとっての問題は、慈善活動が、ジェリビー夫人やパーディグル夫人の場合のように、〈女性の本務〉である家事や育児に障りがあるほどに〈暇を食う〉ものになっていたことであった。慈善が〈暇を食う〉活動になったのは、18世紀末から19世紀初めに活発だったエヴァンジェリカリズムの影響によって、慈善に個人的なコミットメントが求められるようになったからである (Best, p. 154) が、とにかく慈善活動は、金や時間は勿論、〈心を尽くして〉取り組むべき活動になって

きていたのである。そこでヴィクトリア朝時代の女性の多くは、多種多様な慈善活動に文字通り一所懸命に取り組んでいたのである。

ところで男性は、前に見たように、女性不労、女性の本来の場は家庭という考え方に立って慈善活動にいそむ女性を批判することはできなかった。つまり〈女性の本務〉を怠っている場合以外は正面切って批判することはできなかった。そこでディケンズは、主婦であり、母である二人の女性慈善家を攻撃の対象とした。ディケンズはここに活路を見いだしたのである。

Ⅲ. ディケンズによる女性の慈善活動批判

ディケンズの女性の慈善活動批判は、『荒涼館』の語り手の一人であるエスターを通して、あるいはさらにそれにジャーディス氏の評言を付け加える形で行われている。エスターの素朴な、それゆえに信頼できる報告と、世間を知り尽くしたジャーディス氏の英知に満ちた評言とを重ねることによって、読者を説得しようというのがディケンズの狙いなのである。さらにエスターについては次のような性格づけがなされている。

I have a great deal of difficulty in beginning to write my portion of these pages, for I know I am not clever. I always knew that..... I was such a shy little thing that I seldom dared to open my lips, and never dared to open my heart, to anybody else..... I had..... a silent way of noticing what passed before me, and thinking I should like to understand it better. I have not by any means a quick understanding. When I love a person very tenderly indeed, it seems to brighten. But even that may be my vanity. (*BH*, Ch. 3)

語り手としてのエスターは、自分が賢くないことを自覚していて、恥ずかしがりで無口で控えめで家庭的な女性である。つまり彼女はヴィクトリア朝時代の男性にとって理想的な女性である。ディケンズは、批判の対象である女性慈善家とまさに対照的な性格を彼女に与えているわけである。そうしたの は勿論、同性の批判の方が効果的だからである。

ではエスターによる批判を見てみよう。エスターは、ジェリビー夫人につ

いて、夫人の服装のだらしなさから、乱雑で不潔な家の様子、インクまみれになって母親の「文通」の手伝いをさせられている娘の姿、母親にかまってもらえない幼い子供達の様子などを報告し、さらに娘と夫の次のような言葉を読者に伝える。

'It's disgraceful..... The whole house is disgraceful. The children are disgraceful. *I'm* disgraceful. Pa's disgraceful, and no wonder!' (*Ibid.*, Ch. 4)

'My poor girl, you have not been very well taught how to make a home for your husband; but unless you mean with all your heart to strive to do it, you had better murder him than marry him — if you really love him.' (*Ibid.*, Ch. 29)

娘は、家中が、子供たちが、この自分が、父が、恥さらしな状態にあると言い、夫は、本当に愛している人にちゃんとした家庭を与える努力をする覚悟が無ければ、結婚してはいけない、むしろ殺したほうがましだと言うのである。そしてエステルは、いわばジェリビー夫人批判のまとめとして、夫人は先ず 'her own natural duties and obligations' を果たすべきであって、望遠鏡で地平線を見渡してそれらを捜し出すのはその後のことにすべきだと言うのである (*Ibid.*, Ch. 38)。

主婦であり、母であり、妻であるジェリビー夫人は、慈善活動に熱中して「その当然の義務」を怠っている。そしてそのことが二人の〈被害者〉の〈証言〉も交えて〈告発〉されているわけである。主婦であり、母であり、妻である女性の慈善活動は、少なくとも〈自粛〉あるいは制限されるべきである。ディケンズはエステルの観察をとおしてこう訴えているのである。

しかし、『カサンドラ』(*Cassandra*, 1852年に書かれ、1928年に出版された)における Florence Nightingale はそうは考えなかった。『カサンドラ』の中でナイティンゲイルは、キリストは女性を単に男性の情熱に仕えるものではなく、神の代理人としたのであり、そのために女性に 'moral activity' を与えたのだと言う。だがそれにもかかわらず、その使命を果たすべく主婦が偉大な目的に献身すると批判されると彼女は言う。

And then she is blamed, and her own sex unites against her, for not being content with the 'day of little things' She is contemptuously asked, 'Would she abolish domestic life?' Men are afraid that their houses will not be so comfortable, that their wives will make themselves 'remarkable' women, that they will make themselves distasteful to men; they write books (and very wisely) to teach themselves to dramatize 'little things', to persuade themselves that 'domestic life is their sphere' and to idealise the 'sacred hearth'. (Golby, p. 255)

主婦が偉大な目的に献身すると彼女は非難される。同性からも非難される。「家庭生活を破壊する」気かと言われる。男性は「家庭が居心地の悪いところになるのを恐れ、妻が目立つ存在になることを恐れる」。男性は、女性に「小さなこと」の大切さを教えるために、「家庭生活こそが女の場」であることを説くために本を書く。ナイティンゲイルの上の文章のこの要約は、ある意味で『荒涼館』の二人の女性慈善家を描いている部分の〈非難の構造〉の、また目的の要約とも言えるであろう。

ここでナイティンゲイルがしているのは、明らかに女性の「道徳的活動」がもっとも問題視される主婦のその擁護である。彼女としては、主婦の社会的活動が「同性もこぞって」非難するものだからこそ、激越な口調で擁護しているのである。勿論ここには主婦の場合のほうが「小さなこと」にまぎれて活動への取り組みが中途半端になりやすいことに対する懸念もある。ちなみに主婦の本格的な活動の例として彼女が挙げている例には 'emigration' がある (*Ibid.*, p. 251)。ジェリビー夫人の活動は移民を含むから、ナイティンゲイルなら肯定的に捉えたはずの活動である。またディケンズが批判的に描いている、夫人の 'petty details' (*BH*, Ch. 23) に対して示す超然たる態度も、'a serene contempt for our limited sphere of action' (*Ibid.*, Ch. 50) も、ナイティンゲイルの観点からすれば、「道徳的活動」を「使命」として捉え、それを果たしている人間の自信の表れと見ることができる。さらに、アフリカ移民計画に失敗した夫人が 'the rights of women to sit in Parliament' (*Ibid.*, Ch. 67) の運動に転進するのも、社会の歪みを根本から直すためには女性の政治参加が不可欠と判断したためと見ることができるわけである。ちなみにイギリスの女性が完全に男性と同等の選挙権を得るのは

1928年、また、明らかにフェミニストであるミス・ウィスクがジェリビー夫人の娘の結婚式に立ち会った時、‘part of Woman’s wrongs’ (*Ibid.*, Ch. 30) として苦々しい思いで聞いていたはずの、花嫁の誓いの言葉の中の‘obey’という言葉が法律によって削除されるのは、1973年 (Evans, D. T., p. 70) である。

上の引用では妻が社会的な活動をしている場合の夫の苦情しか、つまり『荒涼館』で言えばジェリビー氏の苦情しか出てこないが、次の文章には子供たちの問題も出てくる。

Oh! mothers, who talk about this hearth, how much do you know of your son’s real life, how much of your daughter’s imaginary one? Awake, ye women, all ye that sleep, awake! If this domestic life were so very good, would your young men wander away from it, your maidens think of something else? (Golby, p. 255)

ここではナイティンゲイルの口調はさらに激越になっている。「炉辺こそ大切と言う母親達よ」息子や娘のことは本当に分かっているのか、息子は家に寄りつかず、娘は何を考えているか分からないではないか。「眠っている者たちよ、目覚めよ」。これはジェリビー夫人やパーディグル夫人にではなく「炉辺こそ大切」、家族の団欒こそ人生の中心と考えている母親たちに向かって発せられた問い、というよりも叱咤である。この背後にあるのは当然、どれほど大切に育てても、子供の生活にせよ考えにせよ、完全に「知る」ことなどできはしないのだ。だから子育ては女性が一生を賭けてすべき仕事ではないのだ、という考え方である。そしてナイティンゲイルはこの話を、イエスの母親と兄弟達が布教中のイエスを訪ねて来た時イエスが言った言葉、すなわち、‘Who is my mother? and who are my brethren? Whosoever shall do the will of my Father which is in heaven, the same is my brother and sister and mother.’ (*Ibid.*, p. 255) でしめくくる。血のつながりにかかわらず偉大な目的のために邁進する者の間にこそ母と子の、兄弟、姉妹の関係が生まれるのだという結論である。ナイティンゲイルは、「炉辺」神話と慈母神話という〈蒙見〉を打破するために、いわば切り札を出したわけである。ちなみにナイティンゲイルはこれに続く文章のなかで、母親の愛情の威力がそれほどのものでない証拠に娘たちは ‘*their only chance of*

emancipation' (*Ibid.*, p. 255) である結婚の最初のチャンスに飛びついてしまおうと言っている。そしてこれがまさに『荒涼館』のジェリビー夫人の娘がすることである。もっとも夫人は慈母でも賢母でもないのだから、〈筋は通っている〉のではあるが。

ところで20世紀のフェミニストにとっては、「炉辺」の中心となるべき結婚の安定度が極端に低下している現代にあって、「炉辺」神話はさしたる障害にならなくなっているが、慈母神話は変わらず乗り越えるべき障害となっている。

Chodorow affirms that women succeed at mothering. But the successful mother is not the “perfect mother” — the tireless mother who is always available to her child, whose empathic understanding of her child’s needs never falters, and who happily subordinates her needs to her child’s..... Injecting a salutary note of realism into her theorizing about maternity, Chodorow characterizes successful mothering as “good-enough mothering” and identifies “good-enough mothering” with raising a nonpsychotic child. (Meyers, p. 82)

チョドロウは「完璧な母親」像に惑わされるな、「まずまずのできの」母親であれば十分だ、むしろその方が精神的に健康な子が育つと言う。この言葉の背景にあるのは、先ず20世紀における極端な少子化である。1870年から79年の間に結婚した女性のうち、子供が一人ないし二人の女性は12.5%しかいなかった(Harrison, p. 237)のに、20世紀後半ではこの子供数は標準的なものだから、過保護による弊害を避けるためにこういう考え方が主張されているのである。しかしまた同時に、上の言葉からは、「完璧な母親」、すなわち自分の欲求はかえりみず、四六時中子供の欲求に仕えるという母親の理想像がまだ健在であって、それが今でも母親にプレッシャーを与えている状況が読み取れる。19世紀のディケンズはそういう理想像によって二人の〈駄目な母親〉を〈切って〉いるわけであるが、20世紀の今でも母親に関する神話は生きていて、現実の母親が常にその神話を尺度として測られ、非難されるという状況は存在しているのである。母性神話をはるかに強力であった19世紀に、「道徳的活動」に献身した主婦達が、どれほどの非難、攻撃に耐えなければならなかったかがこの事からも想像されるわけである。

ナイティンゲイルは『カサンドラ』において、主婦に、「炉辺」神話に、また、「完璧な母親」像に惑わされることなく「道徳的活動」に励むようにと説いたのであるが、John Stuart Millの*The Subjection of Women* (1869)には『カサンドラ』に対する言及と考えられるくだりがあり、そこでミルはこう言っている。

A celebrated woman..... remarks truly that everything a woman does is done at odd times. Is it wonderful, then, if she does not attain the highest eminence in things which require consecutive attention, and the concentration on them of the chief interest of life? (Mill, pp. 552-3)

ミルの「女性がすることはすべて半端な時間にされる」という言葉は『カサンドラ』では‘Everything [a woman does] is sketchy’ (Golby, p. 251)という言葉で表現されている。ナイティンゲイルは、この言葉を含む一節において、「女性のすること」が‘study’になる日、すなわちミルの言葉で言えば「継続的な注意」と「一生にわたる関心の集中」が可能なものになる日を待望している。そしてミルもこの点では同じ希望を表明している。しかし、彼が考えている‘study’は哲学や芸術で、ナイティンゲイルの「道徳的活動」——そこには看護は勿論慈善活動も含まれるのだが——ほどの幅がない。ミルの場合、慈善活動、殊に主婦のそれは、少なくとも‘[women’s] debt to society’ (Mill, p. 579)である子育てが終わってからでなければしてはいけないものになっているのである。Male feministの一人であるミルも、主婦の慈善活動についてはディケンズと同じ考え方をしているわけである。

次はパーディグル夫人の活動振りとそれに対するエスターの反応である。エスターはまず、子供たちの小遣いまで寄付させてしまったり、いつも子連れで活動している夫人の様子や‘dissatisfied children’の様子を詳細に報告し、夫人の慈善を‘rapacious benevolence’と呼ぶ。そして夫人の慈善は騒々しいわりには小さな成果しか上げられない種類の慈善だという、権威者としてのジャーディス氏の評言を、読者に伝える (BH, Ch. 8)。

さらにエスターは労働者の家庭への訪問について夫人の話を聞き、未熟で労働者階級の人達の気持ちもよく分からない自分としては、こうするのが一番だと考える。

..... I thought it best to be as useful as I could, and to render what kind services I could, to those immediately about me; and to try to let that circle of duty gradually and naturally expand itself. (*Ibid.*, Ch. 8)

エステルは自分の「ごく身近な人達」の役に立ち、情けを施すことが先ず第一と考え、無理にその範囲を広げることはないと言う。そしてパーディグル夫人の慈善の押しつけがましき、無益さを強調した上で、彼女の慈善活動が無理やり範囲を広げたものであるために、その対象となっている労働者の、'patronizing superiority of charitable ladies' に対する 'resentment' をかき立てる結果になっている (Thompson, p. 253) 様子を〈底意ある素朴さ〉をもって伝えている。エステルは、パーディグル夫人の言う中流階級にとっての 'neighbours' (*BH*, Ch. 8) である労働者階級への慈善を、〈原則として〉拒否しているわけである。

つまりディケンズはここで、対面的なパーディグル夫人の慈善活動が、労働者から感謝されないものであるばかりでなく、むしろ「恨み」を買う結果になっている——それは当時の慈善のいわば〈宿命〉であることについては後で述べるが——ことを強調しているわけであるが、実は当時、対面的な慈善活動は強烈な使命感なしでは不可能なものであった。

Despite the disappointments, abuses and hypocrisy, visitors from all social backgrounds had reason to be proud of the countless mercies shown to their neighbours. That this work was often so arduous, time-consuming and dangerous to the health of volunteers (many died of disease and some were killed on their rounds) suggests a level of selflessness and commitment which were remarkable. (Finlayson, p. 54)

パーディグル夫人の慈善活動は「過酷で、暇を食う」ものであったばかりでなく——夫人の自慢は 'I am incapable of fatigue' (*BH*, Ch. 8) であることが思い出される——病気や暴力による身体的な危険をもともなう、また、これらに比べれば小さなことではあるが、'indignity' に身をさらす (Checkland, p.309) 覚悟の必要なものだったのである。ディケンズは夫人の多面的な慈善活動の宗教的な面だけを取り上げて、夫人の「献身」を貶め

ようとしているのであるが、そのことはまた主人公のエスターに慈善的な行為のなかでもっとも〈分かりやすく〉、読者の共感を得やすい病人の看病を——ただし彼女が自ら看病するのは、彼女にとって「ごく身近な」召使であって、少年労働者ジョーではないのだが——させ、伝染病に感染させ、死に直面させることによってさらに強調されている。しかし〈確率〉で言えば、対面的な慈善活動を継続的に行っているパーディグル夫人のほうが、伝染病に罹る率は高かったはずであるし、それだけ、彼女には「誇りを持っていい理由」があったのである。

それに、忘れてはならないのは、エスターが、労働者の‘dirty’で‘on-wholesome’な生活環境や、労働者の妻の‘marks of ill-usage’を見ることができたのも、‘What the poor are to the poor’を知ることができた(BH, Ch. 8)のも、パーディグル夫人の対面的な慈善活動のお陰だったということである。夫人の家庭訪問に同行したことによって、エスターは、中流階級にとっての「隣人」である労働者階級を——召使を通してではなく——知る機会を得たのである。そして実際に見て知ることが、後で見ると、大きな歴史的コンテクストの中で見た場合の慈善活動の、中心的な意味となっていくのである。

そして知ることの大切さはパーディグル夫人が説いていることでもある。

‘But they [her children] are my companions everywhere; and by these means they acquire that knowledge of the poor, and that capacity of doing charitable business in general..... (Ibid., Ch. 8)

慈善をするためには先ずその相手を知らなければならない。そう信じているから、また、わが子に慈善の道を歩んでもらいたいから、夫人は子連れで活動しているのである。先ず「貧しい人達について知識を得ること」、そして必要なことをすること、これが慈善にとって一番重要なことだと夫人は考えているわけである。

慈善活動によって見て知ることから重要な足跡を残した、パーディグル夫人の先輩と言っていい女性に、Elizabeth Fryがいる。フライは1813年にロンドンの監獄を訪問し、300人の女囚が、老若、既決、未決入り交じって、不潔きわる二つの監房に収容されている状況を見て、‘prison reform’に乗り出した(Anderson, pp. 177-8)。

また Octavia Hill は、パーディグル夫人やエスターと同じように貧しい労働者の「不潔で、不衛生な」住環境を見て、‘the problem of how to rehouse some of London’s poorest people’ に取り組んだ。その第一段階はス 1864 年にスラム街の家を三軒買い取り、それを改造した上で労働者に貸すことから——つまり良い住環境のモデルとなる家を労働者に経験させることから——始まったのであるが、彼女はその後も地道な努力を積み重ねて、‘the pioneer of housing reform’ と呼ばれるようになった (Perkin, J., p. 216)。ちなみに「住宅改善」の中心になったのは ‘council housing’ であり、公営住宅への取り組みは、一番早かったリヴァプールで 1869 年、ロンドンでは 1892 年に始まった (Burnett, p. 185) のだから、ヒルの〈労働者に優しい大家〉としての活動は、公営住宅運動に先鞭をつけたものと言えるわけである。またヒルは、後で見るように、貧しい人達の中で暮らして、貧しい人達の生活実態を良く知った上でなければ実のある慈善活動はできない、と考えた人達が 1860 年代の末に ‘East End settlers’ としてスラム街に入っていた時、すでに、‘benevolent landlady’ として住民に受け入れられて (Perkin, H., p. 446) いた。

同じように、特に貧しい家庭の女性達に「虐待のしるし」を見たことから Frances Power Cobbe は、1870 年代に ‘Wife Torture in England’ の問題、広くは家庭内暴力の問題に組み、運動を展開した (Caine, pp. 135-6)。勿論コビーも慈善活動のなかで家庭内暴力の実態を見、知ったのである。

パーディグル夫人が説いた、貧しい人達の生活実態を知ることが慈善の基本であるという考え方は、ヒルやコビーのような後輩に受け継がれ、そのお陰で彼女たちは大きな成果を収めることができたと言える。夫人のような 19 世紀半ばの無名の慈善活動家たちは、‘pouncing upon the poor’ (BH, Ch. 30) と批判されようと、ある場合には 20 世紀後半にまで続く系譜の〈中継ぎ〉としての役割を立派に果たしたわけである。

IV. 歴史的コンテクストから見た慈善

19 世紀初頭にはすでに慈善は救貧法による貧者の救済を補完するものとして社会的弱者救済の両輪の一つになっていた。そして前に見たように〈慈善事業熱〉は高まる一方で、1868 年には、

'There is not a want, or form of human wretchedness, for which provision is not made in more or less degree..... From the cradle to grave, benevolence steps in to aid.' (Evans, E.J., p. 283)

と言われるほどに、多種多様な「困窮」や「悲惨」に対応する慈善の形ならびに慈善組織が存在するようになっていた。当然のことながらこれらの慈善組織は、大小様々であることは勿論、組織としての整い方も様々であった。そして何よりも当時の識者たちを困惑させたのは、それほどの数の組織と努力にもかかわらず、一向に効果があがっている様子がなく、むしろ弊害さえ見受けられることであった。

その弊害とは、伝統的な慈善の中心となっていた 'indiscriminate benevolence and pecuniary almsgiving' (Perkin, H., p. 447) が持つ 'demoralizing' (Best, p. 157) な影響、すなわち、'the very foundations of the self-respect, self-help, and self-control' (Mill, p. 567) に与える有害な影響であった。ちなみに伝統的な慈善のあり方は有害であるというこの考え方は1860年代から優勢になってきた考え方である。そのために1850年代の初めに書かれた『荒涼館』では、ジェリビー夫人とパーディグル夫人の〈不自然な〉、伝統の本流から外れた慈善と、スナグズビー氏の、当時としては〈自然な〉慈善、すなわち1860年代の言葉で言えば「無差別な慈善と金銭的な施し」が対照的なものとして描かれている。10年ばかりの間にスナグズビー型の慈善は批判の対象となってしまったわけである。慈善を取り巻く〈気候〉は変わったのである。

1860年代に慈善を取り巻く〈気候〉に起こったもう一つの変化は、前にも述べたが、貧しい人達の生活実態を知ろうという気運の高まりであった。そのきっかけになったのは、農村部の地主は農業労働者の生活実態をある程度把握しているのに、都市部では、'men and women of moderate means lead a life altogether apart from that of the poor' という 'social disintegration' の実情 (Perkin, H., p. 446) の自覚であった。そこで都市部では、「隣人」である労働者の生活実態をその地域の中で生活することによって見極め、必要な慈善を行おうという運動が起こったのである。オクティヴィア・ヒルは、戸別訪問——パーディグル夫人の知るための方法はこれだったのだが——だけでは充分ではないというこの考え方を実践した人達の一人だったのである。

慈善を取り巻く〈気候〉のこうした変化を受けて、慈善を 'rationalize' (Evans, E. J., p. 283) し、効率をあげるために、また、慈善の対象となる人達をより良く知るために、1869年に The Charity Organization Society (略称 COS) が結成された。そして協会がまず最初に取り組んだのは、各組織の効率的な運営と統合をはかること、救貧法の執行機関との連携などであったが結局特に重要な仕事となったのは、弊害除去のための原則を作ること、また組織的に知る方法を作り出すことであった。

協会の弊害除去に関する原則は、救済の対象となる人達を入念に調査し、'deserving cases' については、'the promotion of habits of providence and self-reliance' に配慮しつつ 'judicious and effective' な援助を行う (Read, p. 130) というものであった。また、慈善の対象となる人達の生活実態を知るために協会が採用した方法は、'investigative methods' (Harrison, p. 193) であり、協会はそのためにケースワーカー制度を導入した。

しかし COS による慈善の「合理化」は、貧困はあくまでも個人の責任であるとする考え方に立つものであり、貧困に喘ぐ人たちに、貧困から脱しようとする〈気概〉を植えつけようとするものであったから、意気込みほどの成果をあげることができなかった。後にイギリス人に分かってくることだが、貧困は個人の責任に帰することのできない、構造的なものだったのである。

そしてこの構造的な貧困は、COS の運動のもう一つ眼目であった、「調査」——前に述べたとおりこれについてはパーディグル夫人は〈中継ぎ〉として貢献していると言えるわけであるが——によって発見される。そして、その発見は COS の存在理由とすべき慈善の否定につながるものであった。その経緯を追ってみよう。

COS の趣旨に賛同して調査を担当した人たちは、先ず、対面的な調査によって、飢餓賃金、不衛生な住環境、教育の機会の不在などの実態を知る。そして早くも 1870 年代から、'the sense of guilt and the yearning for expiation' (Perkin, H., p. 449) を強く感じはじめ、問題の解決に必要なのは、'charity' ではなく 'justice' だと考える (*Ibid.*, p. 449) ようになる。そして 1880 年代になると 'state intervention' (Harrison, p. 192) によるしか解決の道はないとさえ考えるようになる。ところが協会の幹部は相変わらず、慈善という協会の大目的の遂行のみを考えている。調査員は協会を 'my friend and enemy' (*Ibid.*, p. 192) と考えるようになる。協会の内部崩壊ははじまる。おそらくこういう経緯で協会は消滅した。

しかし、協会の積極的な歴史的役割は、知ることを通して中流階級の人達に「罪悪感」を抱かせ、償うべき罪の存在を認めさせたことにあった。なぜならば、伝統的な慈善と1870年代の新しい慈善とを分かちつものは、「罪悪感」であると言えるからである。慈善を施す側の人間が慈善の対象となる人達に、どんな形にせよ、〈引け目〉を感じるということはこれまでになかったことであった。パターナリズムによる慈善の背後には、常にパーディグル夫人の言う 'satisfaction' (*BH*, Ch. 8) があった。〈善行〉を施したという「満足感」があった。自分達が償うべき罪を持った階級に属しているという意識は、まったくなかった。〈引け目〉を感じていたのはもっぱら慈善を受ける側の人達だったのである。

一方、〈引け目〉あるいはそれを拡大した感情である 'resentment' を感じながらも 'patronage' を甘んじて受けていた (*Checkland*, p. 310) 労働者も、〈引け目〉を感じているのは相手のほうだということを感じとり、'endurance' から 'protest' に転じ (*Halsey*, p. 8), 1880年代の後半には抗議行動が頻発する。以前は単なる「恨み」あるいはせいぜい 'mental protest' (*Anderson*, p. 182) に過ぎなかったものが、行動による「抗議」に変わってきたのである。

そして、これらの慈善をめぐる〈気候〉の大きな変化を受けて、1890年代には次のような論調が主流を占めるようになる。

..... 'that the world must be made a better place for the unprivileged many is a conviction which has come home to most of us, however little of Socialists we may be, and the old easy contentment with a social system largely unjust but tempered by "charity" and Christmas effusion has passed away, never to return.' (*Read*, p. 299)

1890年代には、主義主張にかかわらず多くの人々が、「慈善とクリスマスの温かい感情の流露」などでは埋め合わせのつかない「社会組織」の間違いに気づき、「世界」そのものが改善されるべきなのだと思うようになっていたわけである。

当時の貧困は、自助の精神の欠如など個人の責任に帰することのできるものではなく、慈善や温情によって対処できるものではなかった。そのことは1867年のイギリス全家族の階級別収入が物語っている。この統計によれば、

全家族の内、熟練労働者を除く労働者階級の家族が占めるパーセンテージは60.6であるのに対して、収入は28.6% だった (Bédarida, p. 214)。つまり、全体の六割強の人間は、国民総収入の三分の一以下の収入で生活していたのであり、しかもそのうち最下層の一割近くの人達——これが救貧法の救済の対象となっていた人達なのだが——の収入は、2% に過ぎなかったのである。貧困は、構造的なもの、すなわち、階級社会が生み出した、その意味で階級的なもの、階級的な「償い」の必要なものだったのであり、そのことが1890年代になってようやく一般の人たちにも分かってきたのである。

こうしてディケンズの説いた Christmas spirit は過去のものとなり、同じようにジェリビー夫人の「望遠鏡的博愛」もパーディグル夫人の対面的慈善も COS の合理的慈善も過去のものとなった。そしてそれらのバックボーンとして、階級的貧困と、それが生み出す悲惨の救済に——すなわち、階級による階級のための「道徳的活動」に——人々を向かわせた道徳も、同じく過去のものとなった。しかしまた同時に、博愛や慈善もそれを支えていた道徳も、本来の、すなわち、人間による人間のためのものとなったのである。

要するに、一つの階級がもう一つの階級を「隣人」とみなし、その貧困の圧力を和らげたり、一時的に取り除いたりするだけでは不十分だ。「社会組織」そのものを〈正しい〉ものに変えていかなければならない。そのためには〈国〉そのものが変わりかつかわらなければならない。これが、イギリス人が慈善の問題に取り組むことから19世紀の末に出した結論であった。

この結論を踏まえて20世紀のイギリスは階級的貧困の問題解決に乗り出した。当初は貧困の救助——ただし国家による——から始めた。1908年の老齢年金の導入、1909年の失業者救済法を皮切りにイギリスは福祉国家への道を歩みはじめた。福祉による「社会組織」の变革を始めたのである。だがそれは階級的貧困の最終的解決とは程遠いものであった。しかし、20世紀半ばからのイギリスは、階級的貧困の 'abolition' (Halsey, p. 8) に本格的に取り組みはじめる。そしてついに1970年代にはその目標を達成する。1977年には連合王国の労働人口一人当たりの 'social wage' は1,500ポンド近くに達する (*Ibid.*, p. 56) のである。その内訳は、

..... social security, £ 441; education, libraries, science, and arts, £ 314; health and personal social service, £ 281; housing, £ 195; environment services, £ 104; law, order, and protective services, £ 80; food and

transport subsidies including concessionary fares, £45. (Halsey, p. 181)

であった。イギリスはついに階級的貧困の「廃絶」に成功した——しかも「社会組織」の抜本的な変革なしに——のである。ただし1980年代から再び後退の歴史が始まるのであるが。そしてこの後退が、再び慈善からスタートして「廃絶」への道をたどることが必要なところまで進行するかどうかは、少なくとももう一世代を経なければ分からないのであるが。

Works Cited

- Bédarida, François, *A Social History of England 1851-1990*, Routledge, 1990.
 Anderson, Bonnie S., et al., *A History of Their Own*, vol. II, Penguin Books, 1990.
 Best, Geoffrey, *Mid-Victorian Britain 1851-75*, Fontana Press, 1990.
 Burnett, John, *A Social History of Housing 1815-1985*, Routledge, 1991.
 Caine, Barbara, *Victorian Feminists*, Oxford Univ. Press, 1992.
 Checkland, S. G., *The Rise of Industrial Society in England, 1815-1880*, Longman, 1989.
 Evans, Eric J., *The Forging of the Modern State: Early Industrial Britain 1783-1870*, Longman, 1991.
 Evans, David T., *Sexual Citizenship: The Material Construction of Sexualities*, Routledge, 1993.
 Finlayson, Geoffrey, *Citizen, State, and Social Welfare in Britain, 1830-1990*, Clarendon Press, 1994.
 Golby, J. M., (ed.), *Culture and Society in Britain 1850-1890*, Oxford Univ. Press, 1990.
 Halsey, A. H., *Change in British Society*, Oxford Univ. Press, 1982.
 Harrison, J. F. C., *Late Victorian Britain, 1875-1901*, Fontana Press, 1989.
 Meyers, Diana Tietjens, *Subjection and Subjectivity: Psychoanalytic Feminism and Moral Philosophy*, Routledge, 1994.
 Mill, John Stuart, *On Liberty and Other Essays*, Oxford Univ. Press, 1991.
 Perkin, Harold, *Origins of Modern English Society*, Routledge, 1986.
 Perkin, Joan, *Victorian Women*, John Murray, 1993.
 Read, Donald, *England 1868-1914*, Longman, 1987.
 Thompson, F. M. L., *The Rise of Respectable Society*, Fontana Press, 1988.